



今やスーパーマーケットに行けば年中売っているようになったイチゴ。季節をなくした果物の筆頭といえるのかもかもしれません。そんなハウスものが増える一方で、どんどん減っているのが露地栽培。溝口ファームは町内で最後に残ったイチゴ栽培農家になってしまいました。その栽培を一手に引き受けて担当しているのがたま子さん。「そろそろ私も引退だねえ」などと言いながら、イチゴ狩りで訪れる人たちの笑顔を今年も楽しんでいます。



今年も露地ものイチゴの季節が近づいてきました。1戸だけ残っているイチゴ栽培農家。5月連休後に数日肌寒い日があったものの、苗の生育は順調です。

田植えの間を見ながら、花芽を確認します。「花が咲いてから1カ月で摘み取り時期を迎えるから、今年は6月20日ごろかなあ。宣伝もしていないんだけど、もう予約の電話が入ってきているんだよ」。

近郊施設のお年寄りも毎年楽しみにして来るのだそうです。「3年くらい通ってきている」という車椅子のお年寄りが、青空の下でおいしそうに食べるのを見られるのがうれしいと言います。

品種はキタエクボ。「ひところは苗1万本という時期もあったけれど、今は苗7千本くらい。少なくなってきた」といいます。

かつて5軒あったイチゴ農家もなくなり「もうやめようか、なんて毎年思っているけれど、楽しみにしてくれる人もいるから…」とひとり作り続けてきました。

ご主人の復二さん(57)は入植2代目。経営の行方は、3代目敬章さんの双肩にかかっています。

とはいっても、嫁入りした姉さんたちは近所で暮らし、みんな頼もしい農業担い手。両親を手伝っています。もちろん、たま子さんはその中心となる大黒柱。しっかりと頑張り屋ぞろいの姉さんたちにも囲まれ、3代目はおつとちにも構えるタイプのように。食事時には孫の琉光(るこう)ちゃん(3つ)も加わって、毎日にぎやかな食卓を囲みます。

しかし、このような農家は今や町内で少数派。多くは担い手がおらず、平均年齢も70歳近くになっています。「うちの行政区でも農家はみんな70歳過ぎ。うちの父さんが年齢の若いクラスになってしまった」といいます。

毎年のように新たに農地の耕作引き受けを頼まれるのだといいます。最近では農地買い取りの打診も多くなってきたといい、担い手が減る一方の町内農家の行く末が案じられるようです。

孫の琉光ちゃんはトラクターに乗るのが大好き



今年の開花は順調。20日ごろからイチゴ狩りできそう



農作業の休憩時には一家が集まります。その笑顔の中心はいつもたま子さん



今年の田植えも順調なスタートでした(5月上旬、幼苗ポットの水やり作業)

みぞぐち 溝口 たま子さん / 農業 / 21区 ☎82-3158

東川町出身、59歳。東川高校卒。富山県出身の入植農家3代目。高校卒業後、町内のスーパーマーケットに勤めました。職場で一緒だった復二さんと24歳で結婚。1男3女をもうけ、今は跡取りの末っ子長男、敬章(のりあき)さん(24)と3人暮らしです。敬章さんは手伝い始めて4年目。今年から田植え機にも乗るようになりました。水田約20%、大豆畑約40%などを経営し、イチゴ栽培は今年21年目。東川が道内先駆けとなった水稲直播植えが、今道内で再び見直されているといいます。溝口さん方でも少しずつ作付けが増え、今年は「はしまる」「はしのゆめ」で4%に広がりました。